

風景の多元性に着目した地域認識に関する研究 -鉄道的車窓風景を対象とした 写真投影法実験を用いて-

藤澤 奈緒¹・佐々木 葉²

¹非会員 早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail:fujisawa-n@fuji.waseda.jp)

²正会員 博士(工学) 早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp)

人が風景を見る時、その経験の仕方は人によって様々であると考えられる。本研究はその仮定に基づいて、個人個人が地域の風景をどのように見ているか、その実態を具体的に明らかにすることを目的としている。そのため本研究では、明知鉄道明知線の車窓風景を撮影対象とした写真投影法実験を行い、現在の鉄道利用者・過去の鉄道利用者・来訪者という、地域との関わり方の異なる3種類の属性の被験者から、直感的に気になった風景の写真と、その一枚一枚に対する記述のデータを得た。そこから、個人が持つ風景の見方の様々なパターンを抽出し、それをもとに、被験者属性ごとに異なる風景の見方の特徴を示した。

キーワード：多元性, 地域認識, 写真投影法, 車窓風景

1. はじめに

(1) 背景

2004年に景観法が制定されて以来、全国の自治体で景観計画が策定されてきた。しかし、もともと明確な景観資源を持たない地域においては、少しでも歴史的価値のあるものや少しでも珍しいものを取り上げて観光地化を図るなど、持続性に欠けると思われる計画も少なくない。

そもそも、全国的に有名な観光地となるような地域や、誰もが認めるような価値のある景観資源を持っている地域というのは、ごく限られた存在であるといえる。そういった資源を持たない地域は、言い換えれば誰もが共有できるような社会的な価値を有する資源を持たない地域と捉えることができるが、そのような地域の景観計画は、別の切り口から考えていかなければ上手く機能しないのかもしれない。風景という言葉は、「美しいもの」「歴史的なもの」などといったイメージと暗黙裡に結びつけられがちであるが、そういった誰もが共有していると思われる美的評価に関する言葉から、風景を一旦切り離して考えてみる必要があるのではないだろうか。そのためには、集団表象としての風景が成立する以前の、個人個人が自分の中だけに思い描く「個人の風景」というべき対象に迫ることが必要であると考えられる。

(2) 研究の仮説

風景とは、人と環境との間に何らかの関係性が生ずること、すなわち現象であると捉えることができる。同じ空間の中で同じ対象を見ている、環境との関係性の形成の仕方は人によって異なり、そのため認識される風景は人によって一様ではない¹⁾。そしてその理論に基づいて考えるならば、ひとりの人物の中にもまた様々な風景生成の基準があると考えられる。本来人は風景を見るとき、必ずしも社会的に共有されている価値観の基準のみを以て見ているわけではない。たとえば小学校の頃の通学路の風景を思い出してみると、頭の中に浮かんでくるいくつかのシーンは、本人にとって通学路をアイデンティファイするのに重要な要素である。しかしそれらの風景は、必ずしも自分自身の中に明確な評価(好きな風景、美しい風景、地域の中で大切にしたい風景など)をもっているものばかりではなく、なぜその風景が特別記憶されているのか自分でも分からないほど何気ないものや、非常に個人的な体験と結びついた場所の風景などもある。風景が生成される動機にはこのように互いに独立した様々なタイプのものが存在すると考えられる。

また、「個人の風景」について考えるにあたり、哲学の分野から、木岡の著書²⁾を参考としたい。木岡は、風景と

異なる文化圏や社会によってまったく違ったかたちで経験されているものであり、風景経験の在り方は全人類に普遍的なものとして理解されるべきではなく、多元的なものであると捉える必要性を論じている。そして、その多元性について解明する試みとして、風景が成立し発展していく過程を構造化して考えている。それによると、風景には「基本風景」、「原風景」、「表現的風景」の3階層がある(図-1)。基本風景は純粋に個人的な風景経験であり、それが語られることで、社会で共有される原風景へと移行する。また原風景は、絵画などにより表現されることで具体的な形となり、次の段階である表現的風景へと移行する。

すなわち、風景には言語化して認識される以前の低次の風景と、言語を媒介として他人との間で語られ、社会の中で共有される高次の風景がある。この概念に当てはめて考えるならば、広く一般に価値を共有されている景観資源とは、すでに「原風景」や「表現的風景」へと昇華したものであると捉えることができる。

本研究では、個人の水準においても風景はそれぞれのかたちで経験される、すなわち多元的であると仮定し、個人が自分の中だけに持つ風景、本人もほとんど風景としては意識していない風景について着目する。これらは、良いと思う風景は何か、あるいは地域の中で大切にしたい風景は何か、などといった明確な条件付きの問いから浮かび上がらせることが難しい。しかし、これらの無意識的な風景を抽出することができれば、一般的に誰もが価値を共感できるものこそが地域資源であるという考え方からは捉えられなかった地域の特徴や新しい側面が見えてくるのではないだろうか。

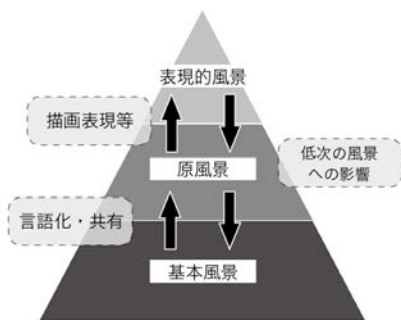


図-1 風景経験の構造(文献2を元に筆者作成)

(3) 目的

本研究の目的は、社会に共有されるようになった集団としての風景以前に存在する、個人的な風景の見方の実態を具体的に把握することである。人が様々な見方で見

ている風景にはどのようなタイプのものがあるかを実験により抽出し、さらに、地域との関わり方の違いにより、風景の見方にどのように影響が表れているかを具体的に明らかにする。

2. 研究の概要

(1) 本研究の位置づけ

本研究は、人が地域をどのように見ているかという認識の仕方を明らかにする研究の中に位置づけられる。

関連する研究のほとんどは、多くの人の地域認識に関するデータを統合し、最大公約数的なものから地域の特性を導き出すというアプローチがとられている。対象地域の地名から連想されるエレメントを街頭インタビューにより抽出した角野の研究³⁾のように、言葉によって直接的に語られるデータを集約して地域イメージを論じたものや、写真投影法⁴⁾⁵⁾など言葉だけでなく視覚的な媒体を用いて多くの被験者に地域イメージを表現させた研究もある。

一方で本研究は、人々の個人的な地域認識に迫り、人によって多様な認識をそのまま多様なものとして捉えようとする点に特徴がある。

(2) 研究の方法

a) 研究の流れ

はじめに研究の仮説を立て、明知鉄道明知線の車窓風景を対象とした写真投影法実験(詳細は次節以降で述べる)を行い、得られた写真データを分類することにより人の風景の見方の多様なパターンを抽出する。その後、その分類に基づいて、地域との関わり方の異なる被験者ごとに風景の見方の特徴を示し、比較する。

b) 実験方法

本研究では、言語によって語ることでできない段階の風景や、明確には意識化されていない状態の風景を抽出する必要がある。そこで、研究方法として写真投影法実験を採用する。写真投影法とは、被験者にあるテーマを与えて写真を撮影させ、その写真の内容を分析することで被験者の心理やそれを引き起こす外的要因等を解明するものである。元は子どもの精神分析の分野において用いられてきたものであるが、都市計画の分野などでも応用されている。

写真を撮るという行為は、無限にある瞬間の中から特

定のシーンを選択して切り取るということである。その瞬間にシャッターを切る背景には自身が意識しているか否かにかかわらず、必ず何らかのきっかけがあるはずであり、そのきっかけこそが、風景生成の要因であると捉えることができる。そのため本研究では、被験者が写真を撮影したことを以て、その瞬間の眺めを風景として認識しているとみなすこととする。

c) 実験対象

写真投影法実験の対象は、鉄道の車窓風景とする。その理由は、鉄道の乗車体験のもつ特徴として、風景が一定の速度で移り変わってゆく点、自力で移動したり運転したりしなければならない移動手段に比べてより客観的に風景を眺めることができるという点が挙げられ、この特徴を活かすことで人が直感的に捉えた風景を把握できると考えられるためである。

また、鉄道は決められた軌道上を走行するため、同乗する乗客に共通の空間体験を提供する。よって同じ空間の眺めに対する異なる被験者の多様な見方が抽出しやすいという特徴もある。

3. 実験概要

(1) 実験対象路線の概要

実験の対象路線は明知鉄道明知線とし、実験実施区間は恵那駅-明智駅間とする。明知線は、岐阜県恵那市と中津川市を通る全長約25.1kmの盲腸線である。

恵那の中心市街地を出ると県道と並行しながら山地へと入ってゆき、飯沼駅を過ぎると峠をひとつ越し、豊かな農村景観の広がる岩村を走る。山岡を出て再び峠を越え、野志の水田地帯の中を走ってゆき、坂を下り切った所で、かつて宿場町として栄えた明智に到着する。



図-2 明知線路線図(Google Map に加筆)



図-3 明知線駅名

対象路線ならびに実験区間選定の理由は以下の二点である。

- 表定速度が約32km/hと低速であり、写真撮影が行いやすい。
- 沿線に目立つランドマークや観光資源などが少なく、単調な景観が続く区間が多い。

(2) 実験概要

a) 実験方法

【手順1】被験者にGPS機能付きのデジタルカメラを渡し、鉄道に乗車しながら気になる風景を直感的に、自由に撮影してもらい。撮影する基準は各自の判断に任せ、どのような動機で撮影してもよいこととする。また撮影枚数についても自由とする。実験で利用する列車は恵那発の下り線とし、撮影はすべて進行方向に対して右側の車窓から行う。

【手順2】降車後、撮影した写真一枚一枚に対して、なぜその風景を撮影したかを被験者に記入してもらう。

b) 被験者

本実験では被験者として、地域との関わり方が異なる以下の3種類の属性を設定した。

表-1 被験者の属性

属性	説明
現在の利用者	日常的に明知線を利用している高校生
過去の利用者	かつて日常的に明知線を利用していたが、現在は利用しておらず、現在も地域に住み続けている者
来訪者	初めて地域を訪れ、過去に明知線を利用した経験がない者

c) 実験実施概要

実験実施概要を、以下の表-2に示す。実験は、現在の利用者10名、過去の利用者6名、来訪者18名の、計34名の被験者に対して行った。

表-2 実験実施概要

実施日	天候	乗車時刻	被験者人数
8/19(日)	晴	14:54-15:43	過去の利用者5名
8/20(月)	晴	17:14-18:03	現在の利用者10名及び過去の利用者1名
8/28(火)	晴	13:50-14:40	来訪者11名
8/31(金)	晴	13:50-14:40	来訪者7名

4. 実験結果

(1) 実験結果

実験の結果、33名の被験者 (b6については、撮影され

た枚数と記述の数に著しいずれがあったため、無効とした)より、計 882 枚の写真データを得た。ここから、撮影に失敗したもの、車内の人物など車窓風景以外を撮影したもの、被験者本人がなぜ撮影したか忘れたものを無効と見なして 60 枚を差し引き、計 822 枚を有効なデータとして扱うこととする。

表-3 各被験者の撮影枚数 (有効データ数)

属性	被験者	年齢	写真枚数	属性	被験者	年齢	写真枚数
a 現在の利用者	a1	16	17	c 来訪者	c1	22	43
	a2	15	33		c2	20	14
	a3	16	13		c3	21	8
	a4	15	52		c4	20	12
	a5	16	35		c5	20	11
	a6	16	35		c6	21	15
	a7	16	7		c7	22	20
	a8	15	24		c8	22	30
	a9	16	12		c9	25	21
	a10	16	20		c10	23	34
b 過去の利用者	b1	63	18		c11	23	15
	b2	63	42		c12	22	20
	b3	60	45		c13	22	21
	b4	63	65		c14	21	12
	b5	54	14		c15	22	59
	b6	-	-		c16	22	14
					c17	22	21
					c18	21	20

(2) 風景の分類

被験者の記述をもとに、どのような言葉・表現を用いて撮影した風景が説明されているかによって、すべての写真を 13 種類に分類した (表-4, 図-4)。さらにそれらを、風景生成のメカニズムが似ていると考えられるもの同士でまとめ、以下の 5 つのタイプに大別した。

I. 絵画的に認識される風景

撮影した対象の状態についての説明や、その見た目から受けた印象、感想などが記述されているものをここに分類した。これらの風景は、「どこの」風景かという点について意識されることがなく、場所という概念から切り離されている。そのためこのタイプの風景の見方は、初めて訪れた者など地域との関わりを持たない人物や、地域についての知識がない人物の中にも存在する。

II. 定位感覚を伴う風景

撮影した写真を、撮影地点を表す言葉を用いて説明しているものをここに分類した。これらの風景は I とは逆に、場所の概念と結びつけられており、自分のいる位置や場所を捉える定位感覚と関わっていると考えられる。そのため、地域についてある程度の知識を持っている者や、地域全体を面的に熟知し、概念的に捉えることができる者の中に存在する見方であるといえる。

III. 個人的風景

撮影した風景を自身の体験と結びつけて説明しているものや、「いつも見ている風景」「なつかしい風景」など自分の記憶やイメージの中にある風景を基準として語られているものなど、撮影した動機が非常に個人的であるものをここに分類した。これらの風景は、生成の要因が主として主体側にあると考えられ、主体が自分独自の見方で見ようとしている風景とも言うことができる。このタイプのもは基本的に他人との共有を前提としない、個人の中だけに存在する風景であるといえる。

IV. 環境により認識させられる風景

「以前と変わった」など、過去に見た風景と変化したという内容の記述があるものをここに分類した。これらの風景は、生成の要因が主として環境側にあると考えられる。III とは異なって主体が積極的に見ようとしているのではなく、環境側の状態が変化したことによって主体はそれに気づかされ、初めて風景として意識づけられるという、受動的な見方であるといえる。

V. 言語化できない風景

撮影した風景を言葉で表現することができないものをここに分類した。このタイプに属するものは記述内容だけを手がかりにこれ以上細かく分類や分析をすることは不可能であるが、これらの中には、明確に意識化される以前の風景が含まれていると考えられる。

(3) 被験者属性ごとの風景の見方の特色

各被験者が撮影したすべての写真の中に、前項で分類した風景のタイプがどのような割合で含まれているかをグラフに表した (図-5)。

a) 現在の利用者による風景の見方

全体として、I. 絵画的に認識される風景、III. 個人的風景および V. 言語化できない風景の 3 パターンで構成されているという傾向があり、II. 定位感覚を伴う風景にあたるものは非常に少ないことが特徴であるといえる。⑨個人的基準による定位 (表-4 参照) にあたるものが多く含まれている被験者は存在するが、特に地名や施設名、地形を表す言葉はほとんど見られない。つまり鉄道を日常的に利用している高校生は、広域的な地域全体の面的な把握はしておらず、そのため、移動とともに連続的に流れていく風景を何らかの形で統合することなく、単に断片的なものの集合として見ていると考えられる。

表-4 見方の違いによる風景のパターン

風景の分類		被験者による記述の特徴	記述例 ※0内は被験者番号/図-3注の写真番号
I. 絵画的に認識される風景	①視対象	撮影した風景を一般名詞のみで表しているものや、写っている具体的な物の名称のみが記述されているもの	・田(c15/写真①-1) ・阿木ダム(b3/写真①-2)
	②状態	撮影した風景の状態を、客観的な表現で説明しているもの	・草がのびていたから(a3/②-1) ・道が遠々と続く(c15/②-2)
	③印象・評価	撮影した風景の主観的な印象や評価等が記述されているもの	・田舎といかんじでいい(a6/③-1) ・山のりんかくが好き(c13/③-2)
	④想像力	撮影した風景からその背後にあるものに想像・思考を巡らせているような記述があるもの	・野志で降りた人。次の列車まで待っているのかな？(b4/④-1) ・田んぼが段になっているその様は、(略)山に囲まれた土地だからその風景(c18/④-2)
II. 定位感覚を伴う風景	⑤到着駅の記録	到着した駅を記録的に撮影し、その駅名だけが記述されているもの	・いわむら駅(c10/⑤)
	⑥地名による定位	撮影した風景を、撮影地点の地名を用いて表現しているもの	・東野車窓風景(b1/⑥-1) ・飯羽間へ入るところ(b2/⑥-2)
	⑦付近の施設等による定位	撮影した風景を、撮影地点の近くにある施設等およびそれとの位置関係を示す言葉を用いて表現しているもの	・恵那高の近く(b2/⑦-1) ・この奥にそば屋がある(b4/⑦-2)
	⑧地形による定位	撮影した風景を、移動によって連続的に体験される地形の変化の中での現在位置を示す言葉を用いて表現しているもの	・これから山の谷へ向かっていく(b5/⑧-1) ・山合いを抜けた風景(b5/⑧-2)
	⑨個人的基準による定位	位置を把握するために個人的に目印にしている風景であると判断できる記述があるもの	・朝、この看板を見て「降りなきゃ〜」と思う(a4/⑨-1) ・よし、やるか〜と思う所(a7/⑨-2)
III. 個人的風景	⑩自身の経験	自分自身や身近な知人に関する記述や、過去の体験についての記述があるなど、被験者とその風景との具体的な関係が判断できるもの	・昔よく魚つかみした岩村川(b4/⑩-1) ・友の家が見えたから(a10/⑩-2)
	⑪記憶の風景との照合	「いつも見ている」「懐かしい」あるいは「初めて見た」などという記述があり、自分自身の記憶やイメージの中にある風景を基準として見ていると考えられるもの	・いつも見ている工場のけむりが見えたから(a1/⑪-1) ・昔見た風景(b4/⑪-2)
IV. 環境により認識させられる風景	⑫環境の変化	「以前と変わった」「いつもと違う」などという記述があり、環境が変化したことで風景として意識化されていると考えられるもの	・阿木川もきれいになった(b4/⑫-1) ・いつもとちがって水がとまっていたから(a5/⑫-2)
V. 言語化できない風景	⑬言語化できない風景	撮影した風景を言葉で表現できないもの	・なんとなく(a9/⑬)



図-4 撮影された写真例一覧

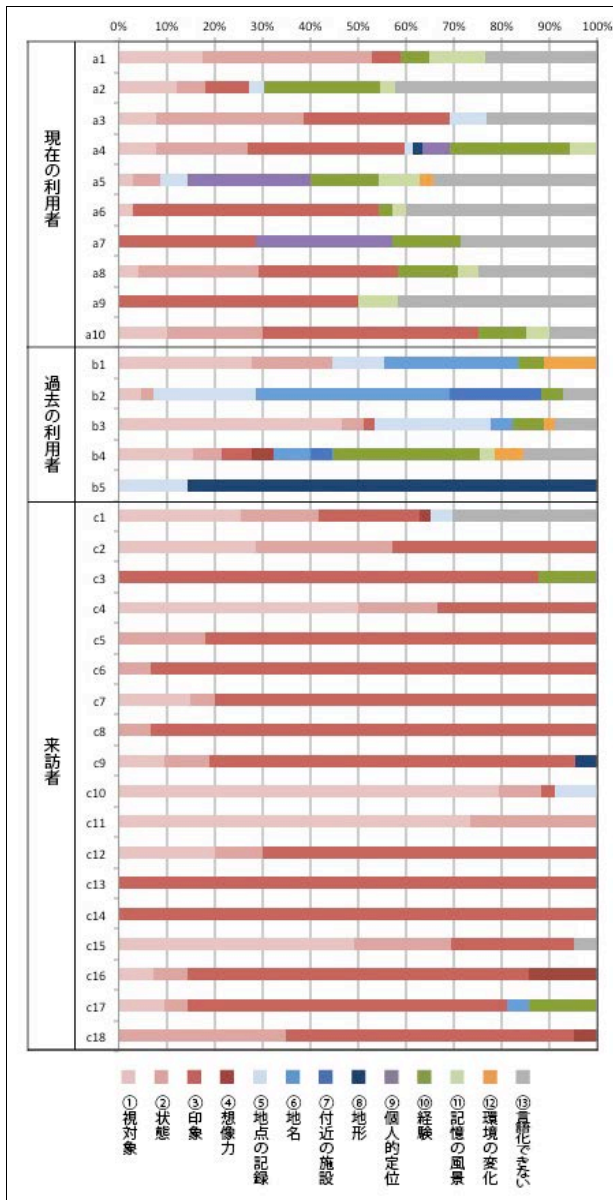


図-5 被験者ごとのデータ内訳

b) 過去の利用者による風景の見方

各パターンの構成割合という点では、他の属性と比べて全体的な傾向が見出しにくく、風景の見方の個人差が3属性の中で最も大きいといえる。

全体として③印象・評価にあたるものが非常に少なく、長い間地域に住み続けていることで風景に慣れてしまい、地域の風景を改めて鑑賞する対象として捉えていないことが推測される。また現在の利用者とは異なり、II. 定位感覚を伴う風景がほとんどの割合を占めている者が存在し、これらの被験者は自分自身の中に地域の全体像があり、ある一貫した枠組みの中で風景を見ていると考えられる。これは他の属性の被験者に比べて地域に関する知識や経験の蓄積が圧倒的に多いことや、鉄道による線的な移動

だけでなく、日常的に自分自身で自動車を運転し、地域内を面的に移動する機会が多いことなどが影響していると考えられる。

c) 来訪者による風景の見方

来訪者にはこの地域に関する知識や経験がほとんどないため、I. 絵画的に認識される風景が大部分を占める。被験者によって、明確な印象や評価を多く記述している者と、見たものを客観的に記述する者とに分かれる。

5. まとめと今後の展開

本研究では、個々人が直感的に撮影した風景を、自分自身の自由な言葉で表現させることで、必ずしも他人との共有を前提としない個人の風景を抽出した。4章で13種類に分類したように、それらには様々なタイプのものがあり、ひとりの人物の中にも多様な見方が混在しているという事実も明らかになった。

また、この分類に基づいて、まず第一段階として地域との関わり方の異なる3種類の被験者ごとに風景の見方の特徴を示した結果、次のようなことが示唆された。主体と地域との関係性が弱い段階では、風景は単に絵画的にしか認識されない。しかし、実際に地域の中で様々な体験をすることによって、次第に自分独自に地域を見る視点が生まれ、個人的風景が生成するようになる。さらに、長年居住する中で地域の中での行動範囲が広がったり、地域に関する概念的な知識を得たりすることで、地域全体を把握する自分なりのロジックを会得することで、それまで断片的にしか見ることのできなかった風景がその大きな枠組みの中の一部として認識されるようになる。以上のようなことは、これまでの研究の蓄積からも言われてきたことであるが、人と地域との関わり方が、個人の風景の見方にどのように影響しているのか、実際に実験を行うことで具体的に把握した点が、本研究の成果といえる。

今後は、属性ごとにまとめて見るだけでなく、さらに一人一人の風景の見方の特徴に迫ることや、また分類した風景のそれぞれの持つ性質や意味についてもより詳しく言及していく必要がある。とりわけ言語化できない風景については、今後の展開において重要な存在であると予想されるため、写真に写っている対象等を手がかりにより細かく分類するなど、さらなる分析が必要である。

※本研究は JSPS 科研費 23360229 の助成を受けたものです。

参考文献

- 1) 篠原修編: 景観用語事典, 彰国社, pp.10, 1998
- 2) 木岡伸夫: 風景の論理 沈黙から語りへ, 世界思想社, 2007
- 3) 角野幸博: 地域イメージの構成要素に関する研究-大阪府南部地域を事例に-, 第16回日本都市計画学会学術研究論文集, pp.373-378, 1981
- 4) 久隆浩: 子どもと地域空間の関わりを分析する手法としての写真投影法の試み, 1992年度第27回日本都市計画学会学術研究論文集, pp.715-720, 1992
- 5) 松島洋介, 奥敬一, 深町加津枝, 堀内美緒, 森本幸裕: 琵琶湖西岸の里山地域における地元住民と移入住民の景観認識の比較, ランドスケープ研究 71(5), pp.741-746, 2008